

政治と宗教研究会より

## ロシア政治と宗教

下斗米伸夫

はじめに

今日いただいたテーマというのは、現代ロシアの政治と宗教について話題を提供せよということでした。実は二〇〇〇年初めエルサレムにいき、イスラエルという国におけるロシアのインパクトというものを垣間みる機会がありました。

そこで聖墳墓教会、すなわちキリストのお墓を訪れました。とりましてる各種の教会というのがあるのですけれども、いくつかの宗派の中でギリシャなどい

くつかの正教の教会があり、正教ではありませんがアルメニア教会があり、コプト教の教会があつたりと、イコンの莊嚴な教会を含めてとりましていました。そしてこの都市ではそれがユダヤ教およびイスラム教と並存している。いま三者の宗教の共存をめぐって大問題を起こしているわけですけれども、それが並存している姿にうたれました。改めてもう少し早くこの地にくるべきであったと感じた次第です。

二〇〇〇年はミレニアムでしたが、辞任したエリツイン・ロシア大統領がさつそくエルサレムに出かけま

した。あるいはローマ法王が二百年ぶりに訪問すると、いうように、エルサレム、イスラエルという地が現代の宗教と政治をめぐる状況に与えるインパクトというのは、ここまでもなく大きいわけです。

と同時に筆者は、イスラエルという国自体にある、ある種の「ロシアさ」とでもいうか、そこに興味をもつておられます。いま人口六百万のイスラエルにこの十年間で百万人のユダヤ系の人々が主として旧ソ連、ロシアから入ってきたわけです。彼らの多くは西岸といつたいわゆる入植地に入っています。しかしそれだけでなく、イスラエルを作った人々、建国の父<sup>11</sup>フーアウンデイング・ファーザーズたち、いわゆるシオニストと呼ばれている人たちのほとんどが、ロシア帝国についていわばマージナルな人々というか、ユダヤ人であつて、したがつて多くロシア語を話す人たちであります。さまざまの時点であの地に集まつて、イスラエル建国を行なつたということです。つまりイスラエルを構成するさまざまなユダヤ人たちの間で「ロシアさ」というものが何重かに折り重なつて出てくる。最近歴

エルでの各種の宗教の折り重なつた構図を通じて現代のロシア政治をどうみるべきか考えざるをえないわけです。つまり、イスラエルという鏡を通じてロシアの宗教と政治の絡みが露顕しているともいえます。私は理論家でも宗教の専門家でもありません。しかしいま、モスクワで政治と宗教について語る、あるいは宗教を政治学的に分析する人たちの多くは政治学者たちですが、その多くがつい十年くらい前までは科学的社会主义とかイデオロギーの専門家であつた人たちで、十年たつたら宗教専門家のような顔をしている、あるいは民族問題についての専門家たちになつてゐるわけです。そういう意味で、宗教というものが政治に与えるインパクトについて、ある種の概括的なことはいえないだろうか、そういうことを考えながらここまでみてみたわけです。

ロシアにおける宗教が政治的に重要なもう一つの大きな理由として、「ロシアの国民国家形成と宗教」というところで、ジユガノフ共産党議長の発言を引用しております。「ロシアの国家体制の発生自体が九八八

史の見直し」ということでロシアの文書館から多くの資料が公開されております。たまたま朝日新聞の二〇〇〇年八月一日の夕刊に私が書いたコラムがあります。「ねじれた歴史」というのがそうですが、イスラエル建国を最初に承認した国として、アメリカと並んで実はソ連があることを論じたものです。アメリカは当然のことですが、国家間関係としては実はソ連の承認のほうが早かつた。そしてそれだけでなく、スターリングが一九四八年四月、大量の武器をシオニストたちに、経路としてはチエコスロバキア共産党を通じて与えていたということが、新しく出てきている歴史資料の中から証明されつつあります。今までもなく冷戦はそのわずか数カ月後に本格化、チエコがその肅清の舞台になり、やがてモスクワでもモトロフ夫人やロゾフスキ外務次官などユダヤ系ソ連人たちが追放される、いわゆる戦後の肅清がその頃からさらに激しさを増して、これがいわゆる冷戦起源論の一つの隠れた歴史をなしでいる。

そういうことを考へるにつけて、モスクワとイスラ

年の「ルーシの洗礼」という宗教現象と関係している」と、彼は指摘しています。

ソ連が崩壊して十年近くなりますが、ソ連に代わつてロシアという国民国家が形成された。これが市場経済への移行と民主化というものとパラレルに進んでいく、あるいはいくべきだ、あるいはいくはずだという言説、これが十年ほど前、モスクワでもワシントンでも声高にいわれました。では、ロシアが国民<sup>12</sup>ネイションとなることの理由は何だろうかということを考えてみると、実は決して自明ではないわけです。ロシアはnation-stateたりうるのかどうか、これは非常に大きな点である。あるいはクエスチョン・マークがつく問題です。

ジユガノフもいっているように、ロシアの国家形成というのは実は千年以上前のルーシのキリスト教、特に正教への帰依というものが起源になつていて、あるいはキリスト教という角度を通じてロシアは国民国家あるいはロシアの国家形成というものを作ったというある種の考え方があります。いまロシアが世俗国家を

作ろうとしているときに、特にグローバリズムの中で国家を作ろうとしているときにこの宗教という要素は一体どういう意味をもつたのだろうか。決してこれは自明ではないわけです。そもそも九八八年にロシア、ルーシが洗礼を受けて、これがルーシ国家の起源だと、百科事典をはじめとしていろいろな本に書いてあるのですけれども、そういうことが一体どこまで事実なのか、あるいはどこまでがある種のイデオロギーなのか、これは歴史家たちが古来分析しておりますが、なかなか確たる答えはないわけです。

にもかかわらず、ロシア政治と宗教との関係ということを説くに際して、ロシア革命と宗教の関係、オーネドックスつまり正教との関係が一つの大柱であることはいうまでもないことです。

ご承知のようにロシア革命を担つた人たちというのは、宗教に対して否定的な、あるいは「理性主義」的な考え方をもつていた。したがつてロシア革命の一つの旗印は、国家と宗教との分離であった。ロシアのそれまでの指導的な宗教であった正教というものが、ツ

アエロパビスムス（皇帝教皇主義）を一つの柱としており、政治と宗教との関係は極めて密接であつたし、いまだも実はそうであるからです。逆にいうと、それに反対して反逆したロシア革命のイデオローグたちが逆に宗教に対して厳しくあたつたことはご承知のとおりです。

とりわけ一九二〇年代末から三〇年代になり、遅れた農村ロシアを工業化した社会主義大国ソ連に変えたスターリンは、農民に対する抑圧と攻撃を行なう過程中で、農村共同体の中心であつた教会をいわば解体する、その精神的な中心である僧侶たちを処断する。そして農村の中の豊かな人たち（クラーク）がどこへ送られたかというと、収容所ですが、その収容所の多くはかつての修道院であつたり教会であつたわけです。特に三〇年代、ソロフキー修道院という極北の修道院は、最大の収容所になりました。いまモスクワのKB本部の前に置かれている、全体主義の犠牲者の碑というものが九一年からあります。ここに置かれている石は、このソロフキー修道院からもつてきた石です。

スターリン体制が少なくとも三〇年代、極めて反宗教的なスタンスをもつた政治権力であったのはいうまでもないわけです。

ところが一九四一年六月二十二日、独ソ戦の開始とともにソ連は戦争となり、モスクワが陥落する寸前まで追い込まれたとき、スターリンがむしろ救いを求めたのは、実は宗教であったということはお聞き及びのことと思います。宗教と民族が復活し、ナポレオンと闘つたクトゥーザフ将軍とか大祖国戦争という名前でもつて民族的なものがリバイバルする、その中心に置かれたものがロシア正教会でした。正式には一九四三年だったのでですが、スターリンとセルギイ総主教が和解し、宗教のリバイバルを象徴するような立派な文書が出されました。これは特に当時の国際状況でも重要だつたわけです。というのもナチスと闘つているセルビアやブルガリアの正教徒に対し、モスクワは第三のローマであるというシケナルが鳴つた。

実は二〇〇〇年末、ソ連の国歌がリバイバルするという話ですが、このソ連の国歌というのは、一九四三

年まではインター・ナショナルが使われていたのです。その時セルゲイ・ミハルコフという著名な映画・演劇界の大御所がいるのですが、彼が四三年からのソ連国歌を作つた。その息子の映画監督ニキータ・ミハルコフがブーチン大統領の国歌問題のコンサルタントとなつてゐるのですけれども、まさにミハルコフ・シリニアが登用されたのは、この一九四三年の宗教との和解というスターリン政治の文脈ということであつたわけです。

しかし、宗教に対し非常にプラグマチックであったスターリンとの対比で、特に後継者のフルシチヨフが逆に宗教に対して厳しかつた理由はまだ十分な説明がなされておりません。けれども、彼がスターリンよりも正教会をはじめとする宗教に対して極めて厳格な、あるいは抑圧的な態度をとつたことがよく知られています。逆にいうと、フルシチヨフの下で宗教抑圧が行なわれたことが、ブレジネフ時代の反動を呼びおこす。ブレジネフ時代というのはソ連崩壊からみ直して極めて重要な時代だと理解していますが、それはさま

ざまな宗教・民族・文化・伝統などに対する市民社会レベル——この場合の市民社会というのは、隠れてまだ表には出てこない市民社会と理解したいと思いますが——、そういうレベルで、あるいは私の言葉で「第二社会」といっているのですが、その第二社会レベルで宗教リバイバル、あるいはさまざまな異端的な言説への憧れというものをブレジネフ時代は生み出してくる。ブレジネフ時代はそういう意味では二重構造があり、公式イデオロギーが化石化していく中で地下伏流のようなかたちで宗教を軸にさまざまな言説が流れ始める。

私が初めてモスクワに行つたのは七五年ですが、その時例えば復活祭になると深夜放送で突然おもしろい西側の映画を見るのです。なぜかとするとみんなが教会にいかないようにするためだという。あるいは逆に物理学者や数学者というような、付き合つた人たちといふのは、あえて教会を訪れる、あるいは民族文化的なもののがリバイバルを考える、これは必ずしも右派的なシヨナリスト的な人だけではないということが私に

はたいへん興味深かつたわけです。ですからあの頃からソルジエニツィンとかサハロフというような異論派の人たちがさまざまことをいい出すようになる、一つの大きなきっかけができたのだろうと思します。

### 一 ゴルバチョフ期の政治改革と宗教

ブレジネフ期からゴルバチョフ期にかけて共産党機関紙の『プラウダ』編集長だったヴィクトル・アフナシエフという方が一九九四年に亡くなりました。一生涯を通じて共産党イデオロギーの宣伝のために闘つたこの人物の葬式が正教であったと最近聞きました。そういうある種の二重構造的なものが、実はゴルバチヨフのペレストロイカを生み出し、いまにいたるさまざまなものを生み出す源泉の一つであつたのではないかということだろうと思います。ロシアの南部に一九三一年に生まれたゴルバチヨフ氏は、スターリンの農民抑圧の犠牲者であり、自分の村の三分の一が餓死したと池田大作氏との対話の中でいつております。そういう村から出てきた人物が政治的なある種の飛躍、つ

まりペレストロイカを考え、そしてそれがいわゆるグラスノスチというものに結びついたこと、これは歴史の事実ということになります。ゴルバチヨフのペレストロイカとは何であり、グラスノスチがどういう成果を生んだかということは、ここでは省略したいと思います。

そこで一つの重要な柱だったのが、ゴルバチヨフにとっては政治改革であり、そしてグラスノスチを進めにあたって重要な柱になつたのが市民社会の解禁、これは非公式集団ということですが、その最大の標的は宗教をどうやって公認するかでした。実はタイムリミットが迫つていたわけです。というのはペレストロイカが政治改革に結びついた一九八七年から八八年にかけて、実はルーシのキリスト教受礼千年祭というのが行なわれる目前であつたからです。この頃から宗教界、あるいはさまざまな市民団体、今までいうとNGO、NPOだけでなく、ロシア国家あるいはソ連国家の隠れた部分であつた正教会もまた、政治的な民主化の波にもまれ始めたわけです。隠れた部分といったの

は理由がないわけではなく、ロシア正教会というのはスターリンと和解した一九四三年以降、エスタブリッシュメントの一部であつた。あるいはノメンクラトルーラの中に総主教を頂点とする正教会というものがきちんと位置付けられていたと理解しております。ピーメン総主教、それからいまのアレクシ二世を含む人々は、党と政府、特にソ連共産党的イデオロギー部門の中の、宣伝部の中の極めて重要な位置付けをされたいわゆるノメンクラトルーラであつたこと、これはいまは疑う余地のないことです。

しかし、それは公式のイデオロギーとはやや離れたかたちで存在していたものであつたとすれば、一九八八年ゴルバチヨフはこのノットを切り裂いたわけです。すなわち政教和解がこの段階で初めて成立し、正教千年祭をきっかけとして、ロシア革命後初めてバイブルがロシア語で公式に刷られるようになつた。それまでは逆にいうと、バイブルをソ連が印刷したことはなかつたわけですが、そういうかたちで出てきました。さらにそれを保障するために、ゴルバチョフは一九九〇

年「良心の自由と宗教団体に関する法律」というものを認めた。そこであらゆる宗教は多元主義的な宗教ということで、等しく平等に扱うということを宣言するわけです。ゴルバチョフ周辺およびリベラルな改革派の人たちが、そういうかたちで宗教と政治にコミットし始めた。非常にリベラルな宗教の最初の法律というものが、この一九九〇年の「良心の自由と宗教団体に関する法律」にみられたわけです。

しかしこのプロセスは同時にさまざまな勢力の自由化をもたらし、それがソ連という枠組みに押さえられないかたちで出てくる。最大の問題は、実はウクライナ問題だったわけです。ウクライナというのはキリスト教が最初にやつてきた地域ですが、そこがロシアから抜ける、あるいはソ連からの独立を主張する。ウクライナのノメンクラトゥーラのモスクワに対する独立という要求が、ロシアに現われたエリツィンの勢力ともいしまって、ソ連邦という国家を一発の銃声なしに崩壊させた。これが一九九一年十二月二十五日のソ連崩壊であったことはご承知のとおりです。

Fの理論家とモスクワの支持者たち、つまりエリツィンのブレーンは一刻も早く国営企業経営を民営化し、民間に移すことが良いことだという。その結果起きたさまざまの不平等、混乱、腐敗その他についてはお聞きになつておられます。

## 二 ロシアの国民国家形成と宗教

そういう状況下で宗教というのはどういう意味、位置をしめるのだろうかということです。そういう状況が生み出すさまざまな心理的な空白、あるいはイデオロギー的な混乱、そしてそれを裏打ちするような経済的な崩壊、そして何よりも政治秩序そのものの崩壊をもたらすようなものが宗教の位置を二重・三重に政治化させる。同時にそういう宗教というものを通じてロシアの混乱が浮かび上がつてくる、そういう構図があるのでないかと思われます。

ごく簡単に制度的な配置をみてみると、ロシアは現在はいうまでもなく宗教国家ではありません。つまりロシア正教は国教ではありません。そうではなく、憲

法は世俗国家であることを規定しております。これは旧ソ連の他のすべての国々でも憲法ではそう書いてあるわけです。もう少し正確な方をすると、一九九三年憲法の第十三条というのは、国家が特定のイデオロギーをもつことを否定しておりますし、社会组织というものは法の下で平等であるというふうに規定しているわけです。さらに第十四条では、ロシア国家というのは世俗国家であり、国家と宗教は分離し、宗教団体というものもまた社会団体と同様、法の下で平等であるということ、つまり、宗教に関する憲法コメンタリーの表現を引用しますと、宗教は国家に関与しないということを明言しているわけです。しかし、スターリン時代の憲法と同様、ロシアの憲法というのが一体どういう現実的な意味が政治に対してあるのだろうか、このへんはたいへん問題的なところです。

話を宗教のほうに絞つて統けますと、一つの転機になつたのが一九九七年七月の「良心の自由と宗教諸団体法」という法律でした。エリツィン前大統領は二〇〇〇年の秋に回顧録『大統領のマラソン』を書いたの

ですが、この法律についての説明をかなり長々としております。それによると、その法律は議会四百五十人のうち三百七十人の議員が支持した。そして九つの宗教団体がこれを支持していた。その背景としてはソ連が崩壊した結果、西側あるいは東側のさまざまなセクトあるいは外国の宗教団体が跋扈するような事態がおとずれ、したがって宗教を野放しにすることが逆にさまざまなる混乱を生み出すというようになつてきました。したがつてこの法律で多少制限するということをエリツィンは回顧録の中で縷々例を挙げて説明しているわけです。つまり、この一九九七年七月法というのはかなり論争的な状況の下で生み出された。一九九六年に下院が出した草案というのは、一九九〇年の法に従つたような、どちらかといえばリベラルな宗教観、国家と宗教の分離を前提としたようなものがあつた。けれども、一九九七年案はかなり強硬的な法律です。そして後で申し上げるように、その運用ではさらに混乱がみられるわけです。

形式的なことを最初にいいますと、正教だけ「全ロ

他にイスラム教・仏教・ユダヤ教を位置付けています。これに対しここに挙げられないようなプロテスチントやカソリックなどは他の「非伝統的宗教」という第三のカテゴリーに分類されます。こういうかたちで位置付けられているわけです。四番目としてセクトという存在が位置付けられています。つまり九〇年法に法の下で宗教団体もどれも等しく平等であるという考え方があるとすると、ここにある種のヒエラルヒーが想定されているわけです。そういうヒエラルヒーの頂点に立つのが、今までなく正教ということになります。しかもこの法律においては、各宗教団体は一九九九年十二月末までに司法省に登録することを要請しています。大体五十七宗派、一万七千ほどの宗教団体が、九年から二〇〇〇年にかけての時点で存在しています。そのうち二〇〇〇年初めまでに登録を済ませたものが半分くらいしかなかつたのですから、あわててブーチン政権はさらに登録の期間を延長しております。それがいくつかの問題を生み出すわけです。この一万七千のうち約半数が正教で、一八%程度がイスラム教、

シリアの歴史的、精神的、文化的に不可欠な部分」として特別扱いにしました。これを支持したのはどちらかといえばリベラル改革には批判的な知識人でした。例えばツイプコ氏はゴルバチョフとも親しい、やや民族派的な政治学者ですが、ツイプコ博士をはじめとしてミグラニヤンなど代表的な政治学者たちもこの法案に賛成する。賛成する理由として彼らがいうには、クリントンやローマ法王が反対するような法律に対しては、逆に支持しなければいけないということでした。現在のロシアの知識人たちのアメリカに対する、あるいは西側に対するある種の幻滅を反映したような論拠が出てきたわけです。ちなみにこの法律に対しエリツィン自身は、アレクシード世がこの法律に個人として賛成であるというふうにいつてきましたが、自分としては憲法の趣旨と、この法律の中身とが必ずしも一致していないからその辺が問題であると考えた、と弁解がましいことをいつているわけです。つまりこの法律は正教に一つ特別な地位を与えていたわけですね。

二番目として、「伝統的宗教」というかたちで正教の

二〇%程度がキリスト教の正教以外のカトリック・プロテスチント諸派など、ユダヤ教と仏教は一%ずつといわれております。その他セクト、例えば「エホバの証人」などが一・五%、二十五万人といわれます。それほど少なくないグループがあるわけです。ちなみにモスクワ市のダイレクトリーに登録されている宗教団体は、アルメニア教会と仏教が一つずつ、カトリックが四つ、イスラムが六つ、プロテスチントが十、ユダヤ教が四つ、これはその下に下部があるわけですが、そういう分布となつております。以上述べたことの中でもロシア正教会の比重が極めて高いということがいわれております。ある研究者は実質は準国教だといつておりますが、そこまでいえるかどうかはともかく、非常に大きな地位をもつております。

しかし世論レベルではやや低下します。九九年ぐらいいの世論調査をみると、正教、つまりオーソドックスは意外に少なく五五%，これに対して三一%は無宗教だと答えています。あるいは九九年のモスクワ大学の調査によると、世論調査の四三%までしかオーソドッ

クスとはいわない。しかもオーソドックスの人できちんと教会に行く人は多くはないわけです。にもかかわらず、九七年の法律その他では、正教に非常に大きな地位と役割を与えていたのです。

もつとも典型的にこれが政治面で現われたのは、六年のエリツィン大統領の就任式でした。就任式ではアレクシード・エリツィンとが一番前に並んだわけです。これはさすがに批判をあげて、二〇〇〇年のブーチン大統領の就任式では、他の宗派の代表が数人並べられた中で一番高いところにアレクシード・エリツィンは置かれました。正教の僧職者たちは軍隊や国家機関の中でも、ある種の宗教的サービスを認められています。二〇〇〇年夏の原潜クルスクの事件でも、正教会の代表がサービスを行なったわけです。しかし、例えばチエーンのイスラム教徒が亡くなつたとしても、イスラム教徒にそういう特権が与えられてはいるわけではない。ですから「法の前の平等」とデファクトな特権との違いをどうやって合理化するのだろう。いろいろない方ができるわけで、法の前では平等だけれど歴史の前ができるわけです。

れだけでなくタタール人もエストニア人も正教会に帰依したものは全て、このルーシのコントロール下に入っているというのがこのアイデンティティであります。さらには、ロシアがそれを正当化する一つの論理に、モスクワは「第三のローマ」というものもある。すなわちコンスタンチノープルが陥落してモスクワの総主教というものが東方正教会のトップとなつたという、これは必ずしも全ての正教会で受け入れられた教義ではないのですが、しかしロシアの中ではそういう考え方があるわけです。ということは、いまでもなくソ連崩壊後のナショナリズムということと正教の存在自体とは、矛盾を引き起こす存在になつていていることになります。

ウクライナについて申し上げますと、ウクライナというのはもともと辺境という意味で、辺境というのはモスクワからみた辺境ではなく、ボーランドからみた辺境であった。ボーランド・リトアニア王国から独立してモスクワと手を組んだ。したがつてキエフ・ルーシが崩壊した後、ウクライナでの宗教はカトリックと

では不平等である、などともいいます。ソルジエニツインは「他の宗教が西側から極めて多大な資金を援助してもらっているのに対し、我々の宗教は非常にみすぼらしいものになっている。そういうある種の不平等というのは止むを得ない」などということをいつています。

しかし実は正教会なるものもさまざまな政治的な問題を抱えているわけです。一つはアレクシード・エリツィンがけているタイトル、すなわち「全ルーシとモスクワ」総主教という肩書きです。現在の東方正教会は十三の独立正教会からなつており、キプロス、ギリシア、アルバニアなどがあります。この中で「全ルーシとモスクワ」の総主教とはどういうことか。それはエストニアもウクライナもベラルーシも実は全ルーシに入るのです。全てのルーシということです。ウクライナの旧名はマロルーシ（小さなロシア）、ベラルーシは白いロシアということで、すなわち正教のアイデンティティからすると、全てのルーシということは大・小・白のルーシ、これを合わせたものがあつてはまります。単にそ

んないます。というのはアレクシード・エリツィンという人物は、

一九二九年エストニアで生まれてエストニアの正教会の修道院からモスクワにやつてきた人物であります。ところが、ナショナリズムが台頭して、祖国エストニアは別の国になつてしまつた。したがつて、東方教会では一民族一教会的なかたちで組織されるものですから、エストニア正教会ははたしてありうるのか。ウクライナの正教会問題とエストニアの正教会問題はロシアの正教会問題と重なつております。

実は「ロシア」は形容詞でいうヒルースキーとロツシースキーという二つがあります。ちょうどブリテンとイングランドの違いのような問題に同定できます。ロツシースキーというのは国家概念だとよくいわれておりますが、この背景には宗教概念があります。ロツシースキーというのはあまりエモーショナルな感じのない国家概念を意味するわけですが、ラフにいってオーネドックスの世界と重なります。それに対しヒルースキーというのは、もう少しエモーショナルな形容詞であり、ちょうどイングランドのようなものです。この二つの概念が区別されているわけですから、いつ

たい現在のロシア連邦のロシアというのは、果たして宗教的に正統化できるのかどうか。実はアレクシ一二世のポリティックスというのがそこで出てくるわけです。

つまり、アレクシ一二世は国家とともに生きる宗教の扱い手であり、したがつて政治権力との関係は極めて密接です。と同時に非常に微妙なところで政治権力と距離をおくことがあります。例えば一九九六年、エリツィン大統領とジュガノフ共産党議長が大統領選挙を戦ったとき、エリツィン周辺でユダヤ人たちがかなりコミットしたことがありますが、ある段階でアレクシ一二世は反対派のジュガノフとの関係を強めました。先程のジュガノフの発言の背景には、教会と共産党との和解のようなことがあります。あるいはエリツィン後をねらう有力な政治家としてモスクワ市長ルシコフという人物がおります。この人はエリツィン的な急進改革に距離を置いた人物で、より国家主義的な人物でした。

このルシコフは何をやつたかというと、宗教の利用

です。救世主キリスト聖堂という、クレムリンと同じ

高さの、ナポoleon戦争勝利を祝つた大きな聖堂が十九世紀にモスクワに作られました。これは、戦闘的無神論という反宗教運動が強まつたスターリン下の一九三一年に爆破されました。この破壊がまさにスターリンの政策を表したのと同様に、ルシコフは救世主キリスト聖堂復活というものを強いロシアの復活、エリツィン的な括弧つきリベラルなものに對して大国ロシアの復活という文脈の中でこの聖堂復活キャンペーンをやりました。いまこれはモスクワでも目立つ建物になりました。そういうかたちで宗教を政治に利用するといふことがみられるわけです。

もう一つ、アレクシ一二世と政治の関係でおもしろい問題は、ブーチンとの関係です。

先程の国歌をリバイバルするということに、アレクシ一二世はいまのところ否定的です。ソ連時代の国歌というのには、宗教否定の問題があるのではないかというのがアレクシ一二世の批判で、これをブーチンがどういうふうにするかは興味深い問題です。

### 三 各派宗教

「伝統的宗教」といわれるイスラム教・仏教・ユダヤ教については問題点を指摘するに限りたいと思います。旧ソ連でのイスラムの役割をかなり高く評価する言説が日本の人たちにみられます。私はロシアの中でのイスラムの宗教的なりバイバルというのは、政治的にそれほど大きいものではないという説です。よくチエチエンなどでみられる民族対立、あるいは山内昌之氏が『ラディカル・ヒストリー』の中で、タタールスタン共和国での宗教リバイバルについて書きました。しかし私のみるところ、シャイミエフという地元の元共産黨の権力者がいわば宗教カードを使つた、宗教というよりエスニックなカードのほうが大きかつた。その証左は、イスラム政党というものがこの十年ぐらいいの選挙の中でほとんど成功していないことです。むしろイスラム勢力を特徴づけるのは政治的分断であり、あるいはチエチエンの政治プロセスをみておりまると、民族ですらない、チエチエン民族が一体として

ロシアと戦っているという構図は、モスクワがおろかな政策をやつたときだけ生じるにすぎず、残りは全て氏族社会（ティイナーといいます）が、拡大家族のような氏族的な團結でしかない。これがいわばさまざまなかたちの問題を起こしているのだという理解を筆者はしております。たしかにチエチエンには、ワツハーブ主義とロシア人たちが呼ぶサウジアラビアからのイスラム系の圧力があります。これは同時に資金、武器そして人材が入ってきて、地元民とさまざまな対立を起こしている。さらにその背景に石油利権問題も絡みます。いずれにしろ、イスラムというのは政治的ファクターとしてはロシアの政治ではそれほど大きな問題ではないのだろうと考えています。

次に、ロシアにおけるユダヤ教の問題とは何なのかというのにはたいへんやつかないことです。実は千年前にキエフにルーシができる頃に、いまのチエチエン共和国のちょっとと南辺りですが、ハザーリア、ハザール王国という国があつて、トルコ系の民族の国家ですが、ここにたしかにユダヤ教徒が入って、国教化したので

す。なぜ王様たちがユダヤ教徒になつたのかという話を少し朝日新聞の一月十二日夕刊で紹介しました。このハザールの民がその後どうなつたかという話はたいへんおもしろい問題です。ちなみに中国史では北宋の時代、まさにこのハザールが崩壊した後にユダヤ人と称する人たちがやつてくるわけです。

ロシアにおけるユダヤ人問題というのはもちろん、宗教の問題、セム系の民族の問題、あるいは母系社会的な問題などさまざまな問題が絡んでおります。ただ、ユダヤ人たちがロシアの、あるいはソ連の政治経済に、あるいは学術文化に与えたインパクトについては、やはりエリツィン政治というものの中でユダヤ人のファクターがかなり重要である。エリツィン時代はこれ抜きにはほとんど理解不可能だろうとみております。いまモスクワを握る新興財閥とか金融集団とかメディア王とかさまざまな人たちが、エリツィン一族の周辺にかたまつてさまざまな政治・経済ドラマを開拓してきました。そして九七年九八年の金融危機の中でアメリカ経済にまで波及しかねなかつたほど、モスクワとウ

オールストリートとの関係が密接であったことはお聞き及びのとおりです。これを宗教の問題というかたちで理解すると、ユダヤ人教会に属する、グシンスキーという人物、ロシアの独立系のテレビ局およびメディアを握っていたリーダーですが、あるいは彼とは対抗しているベレゾフスキイという金融と流通部門をコントロールした人物がエリツィン政治のキー・ファクターとなつておりました。九六年のエリツィン選挙といふのは実は彼らのもつていた金融資本、それからメディアの力をもつてエリツィン政権二期ができたということはいまでは常識です。

これ以上になると複雑な問題が出てきます。逆にそ

のことゆえに、いまのロシアのメディアとかあるいは

反対派のメディアの中で、反シオニズムといういい方でエリツィンおよびその周辺に対する批判勢力が生じます。それが経済改革論争などと絡んで難しい問題を出しているわけです。そしてその片方の極では反ユダヤ主義になつて出てきたのです。

問題はこういう反ユダヤ主義が、特に経済改革など

であまりうまくいっていない特定の地域、例えばロシアの南部、あるいは極東などで強い政治潮流になつてゐる。そしてそれが時に特定の勢力と結んで出てくる、反ユダヤ主義集団というものがロシアの政治に大きな影響を与えるようになりました。ちなみに現在のブーチン政権はどうしているかというと、グシンスキーとベレゾフスキイという二人の金融王たちに対して攻撃していることはご承知のとおりですが、同時にユダヤ人教会を二つに割つて、より伝統主義的な正統派のユダヤ教徒たちを重用して、この二つのグループを分断することにブーチンは成功しました。そういうかたちでブーチンはディバイド・アンド・ルールで臨んでいるわけです。

次に「非伝統的宗教」ですが、市民社会の中でのゼクテ（宗派）とキルヘ（教会）ではありますけれども、まさにゼクテであるようなグループ、これはソ連崩壊後あるいはその前ぐらいから、滔々たる勢いで入つてきました。エホバの証人をはじめ、ルター派、プロテリアン、メソジストなどさまざまなグループが入

つてきたわけです。しかし同時にそれだけでなく、オウム真理教だと新興宗教もあります。オウム真理教問題とは日本人からすればロシアの混乱がもたらしたものと理解しているわけですが、ロシア人たちはあれは日本人がもたらした文化的影響だといつてゐるわけです。

それはともかく、現在当局は「全体主義セクト」、あるいは危険なセクトというカテゴリーを作り、こういう宗教集團に対しかなり制約的な動きに出てゐるわけです。制約的とはどういうことかと云うと、法的にはこういう伝統的宗教團体も登録して十五年間は試行の期間となる。したがつて登録したとしても、土地の所有や銀行口座開設、文献の配布とか海外から司祭を呼んで説教するなどということに対し、かなり組織的な制約が入つてゐるわけです。これはちょうどロシアの政党作りと同じなのですが、宗教組織というものは三つの支部と各支部に十人以上のロシア人がいないと登録させない。すなわち外国人がやつてきて勝手にやつてゐるようなものは認めない、というようなことになつたわけです。

ここまで宗教を一瞥したわけですが、それではそういうことに対する世論はどうなつてゐるか。これはさまざまなることがあります。ロシア正教に特權的な地位を与えるあるいは伝統的な宗教に与えることに対する世論はかなり批判的で、どこの世論かによつても違うのですが、ある世論調査によると、全ての宗教は平等であるべきというのは七四%の支持、宗教にはほとんど関心がない一一・三%、他の宗教は嫌いとか否定する九%，というような最近の世論調査の結果です。か

なり宗教の実態と異なつた状況がみられると思ひます。先ほど申し上げた司法省の登録は、最初九九年末でした。非伝統的宗教については、完全な宗教になるには更に十五年間かかるという状況のもとで、いまブーチン政権を迎えたわけです。

#### 四 ブーチン政権と宗教

ブーチン時代になつて宗教政策に何らかの変更がみられるのか、これは微妙なところです。

ブーチン大統領は強い国家ということをいつております。そういうこともあつて、正教的なるものとの関係は強いようにもみえます。しかし他方では国際社会あるいは国内の他の宗教グループとのバランスもとらざるをえないということで、彼の就任式で正教は同輩者中の第一人者の地位であつたわけです。もう一つ最近話題になつてゐるのが宗教法で、登録することがたいへん厳格で、あるいは地方で混乱しており、その辺をもう少し整備して一年間延ばすということをやるようになりました。しかし反面、ブーチンは登録しなか

つた宗教團体についてはあらゆる特權が拒否される、権利を失うということを明言しております。いま問題となつてゐるのはエホバの証人ですが、これを登録するかどうかということが大きな問題になつております。あるいはハバロフスクで、最近バプティストのアメリカ人宣教師がやつてきたことに対する締め付けをやつてゐる、あるいはサイエントロジー派は、キリエンコ前首相が関係を疑われたセクトですが、ここでの税務調査とか登録拒否をやつて、このグループから国際的な訴えが出されているということです。

#### 五 宗教と政治

そういうことで一応宗教團体は一瞥したわけですがれども、最後に宗教と政治という肝心なところになつてきたわけですが、一つのパラドックスは、ロシア正教は宗教改革を否定している、あるいはアレクシ二世は宗教政党に對して極めて否定的であるということです。国家自体が宗教たるんとしているからなのか、これは比喩的な方ですが、アレクシ二世には宗

教が政治にコミットするということに対するある種の拒否反応があるように思います。一つは、彼に対するライバルは同じ正教の中でもどちらかといえば造反的、異端的な人たちでした。ロシア正教会といつてもともとロシア正教自体の中でラスコリニコフとか古儀式派とかさまざまな異端がいたことはいうまでもないことです。特に古儀式派はボルガ沿岸のほうに移って、宗教だけでなく商業活動をかなり熱心に行なつて、もしあのグループが育つたとすればロシアにプロテスタントテイズムの倫理があるいは芽生えたのかもしれません。そういうことをいうロシア人がいるほど、そういう潮流がないわけではないのです。したがつて、特に九三年の選挙の時に聖職者が議員になれるかということで、異端派の議員が立候補したとき、アレクシ二世はこれを拒否したわけです。他方で、ある意味での大きな政治にはエリツィンと少し距離をとるためにアレクシは共産党に寄つたり、あるいは九三年に議会とエリツィンがぶつかつたときには、仲裁の労もとつたということです。そういうことがアレクシ二世のことです。そういうことをアレクシ二世のところがあるかと思います。

そういう意味では正教会も、宗教政党、キリスト教民主党のようなものを作ることには基本的にはあまり動きはありません。イスラム教については、一九九五年の議会でヌルというイスラム政党が出てきました。しかしこれはわずか三十万票、だいたい一億五千万人のうち二千万人がイスラム的な影響下にあるとすれば、そのうちの一・五%しか選挙でとらなかつた、あるいはそれなかつた。イスラムのさまざまな宗教組織というものは、政治的には三十ぐらいの潮流に分かれているという説がありますが、必ずしも一枚岩的な政治的な意志があるわけではない。むしろその中で問題があるとすれば、ワッハーブ主義やイスラム原理主義などが

地方ではかなり影響力をのばしているということで、これはただし政党ではなく政治運動というカテゴリーに近いのだろうと思います。

その他仏教についてはほとんど触れませんでした。仏教はブリヤート・モンゴルとかカルムイク地域が中心ですが、モスクワの知識人たちの間には仏教に対する憧れというものがこの十年間かなりあります。ロシアの知識人たちの間には、オリエンタルな世界に対する関心、いわゆるユーラシア主義、ヨーロッパ・アジア主義的な人たちがかなり存在しており、そういう人たちの間にはインド文化あるいは仏教文化に対する強い関心があります。モスクワの仏教センターというのはそういうものの表れだらうと思います。しかし、政治的にはさほど大きな比重はないかと思います。というわけで、現在のロシアで政治と宗教がどういう位相にあるのか、雑駁な話をさせていただきました。

(しもとまい のぶお／法政大学教授)

(本稿は、二〇〇〇年十一月三十日に行われた研究会での報告)

内容に加筆いただいたものです。)